

令和2年度

地域経済産業活性化対策費補助金

(被災12市町村における地域のつながり支援事業)

取組事例集



はじめに

本事業は、福島相双復興官民合同チームの個別訪問活動を経て集められた被災地域の声や要望を基に、経済産業省で平成28年度に設けられた事業です。東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴い避難指示等の対象となった福島県田村市、南相馬市、川俣町、広野町、楡葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村及び飯舘村における被災者の人々とのつながり創出を通じ、地域の活性化、さらには産業復興や、まちづくりにも資するような取組を支援することを目的とし、令和2年度「地域経済産業活性化対策費補助金(被災12市町村における地域のつながり支援事業)」を実施しています。

今回、取組の事例集をまとめるにあたり、これらの取組が広く伝わって地域の再生に繋がる一助となり、さらにこれらの取組を参考に今後の被災地域のつながり創出やコミュニティ再生に取り組まれる皆様の活動の一翼を担えることができれば幸いに存じます。

最後に、本事例集の作成にあたり、取材や資料の提供等にご協力をいただいた各取組団体の皆様はじめ関係者の皆様方に、心から感謝申し上げます。

令和3年3月

株式会社ジェイアール東日本企画

令和2年度 地域経済産業活性化対策費補助金
(被災12市町村における地域のつながり支援事業)事務局

目次

被災 12 市町村における地域のつながり支援事業 事例紹介

- | | | |
|----|--|----|
| 01 | 都路町の方言と民話の次世代継承～「方言・民話を語り継ぐ会@都路町」と「都路方言かるた大会」を通して、さらなる地域の絆を深める取組み
(対象者:田村市 / 実施地:田村市) | 2 |
| 02 | 地域へつながれ!笑顔と元気プロジェクト
(対象者:広野町 / 実施地:広野町・楡葉町・富岡町・川内村・大熊町・浪江町) | 3 |
| 03 | 町のにぎわいづくり支援事業～日曜カフェ企画運営～
(対象者:富岡町 / 実施地:富岡町) | 4 |
| 04 | かわうちお楽しみプロジェクト
(対象者:川内村 / 実施地:川内村) | 5 |
| 05 | ふたば、ふたたび。まちなかガーデンプロジェクト
(対象者:双葉町 / 実施地:双葉町・福島市・郡山市・いわき市・加須市) | 6 |
| 06 | 「震災10年。子供達とともに浪江町の将来を描く」
(対象者:浪江町 / 実施地:浪江町) | 7 |
| 07 | 押し花教室
(対象者:浪江町 / 実施地:いわき市) | 8 |
| 08 | 「世界で一つのオリジナル器をつくろうPart2」
(対象者:飯舘村 / 実施地:飯舘村) | 9 |
| 09 | 子どもと母親、高齢者へのアロマセラピーワークショップ開催事業
(対象者:飯舘村 / 実施地:飯舘村・福島市) | 10 |
| 10 | ふるさとを思いみんなで地域伝統工芸を学ぶ「大堀相馬焼陶芸教室」
(対象者:南相馬市・富岡町・大熊町・双葉町・浪江町 / 実施地:南相馬市) | 11 |
| 11 | 羊毛でつながるコミュニティの輪
(対象者:南相馬市・浪江町 / 実施地:南相馬市・川俣町・浪江町) | 12 |
| 12 | 手芸やガーデニングを通して生きがいを見出す教室
(対象者:楡葉町・富岡町・大熊町・浪江町 / 実施地:いわき市) | 13 |
| 13 | 第2回県北方部復興公営住宅合同グラウンド・ゴルフ交流会
(対象者:富岡町・大熊町・双葉町・浪江町・飯舘村 / 実施地:福島市・二本松市) | 14 |

※掲載している取組については、費用の一部を自己負担している場合があります。

取組
団体

都路民話の会

代表者 渡辺 美智子さん

取組
名称

都路町の方言と民話の次世代継承～「方言・民話を語り継ぐ会@都路町」と「都路方言かるた大会」を通して、さらなる地域の絆を深める取組み

取組の概要

田村市都路町は町全域が避難区域となりましたが、今では約9割近くの帰還率となっています。町の歴史を振り返る余裕が生まれ、世代を越えて都路の方言と民話を守り、保存したいという声が聞かれるようになりました。取組では、震災前から方言と民話の伝承活動をしている都路民話の会が、次世代継承を目的に「方言・民話を語り継ぐ会@都路町」や「都路方言かるた大会」を行いました。

取組の様子

それぞれの取組は、震災帰還後に地元住民が開設した古民家「よりあい処 華」で開催されました。屋内には囲炉裏もあり、民話を披露する雰囲気としては最適なものでした。

「方言・民話を語り継ぐ会@都路町」では、小中学生とその保護者及び高齢者を対象に、方言について楽しみながら理解できるよう、都路民話の会の語り部によって地元の民話が披露されました。次に、古道小学校の元校長が「都路の小学校昔話」を、最後に方言の専門家である福島大学人間発達文化学類教授による「田村の方言について」の講話を行いました。

「都路方言かるた大会」には、小学生6名が競技者として参加しました。都路民話の会の語り部によって、読札が読み上げられるたびに、大人たちの声援を受けながら、一生懸命に競技に集中していました。子供から高齢者まで多世代が参加し、暖かい雰囲気で行うことができました。また、すべての参加者が初めて耳にする方言や言葉があり、どの参加者も興味深く聞き入りながらも、笑い声があふれる会となりました。

実施者の声

多世代がこのように楽しみながら方言を学ぶ姿勢や、小学生が興味深い表情で参加している姿を見て、やりがいを感じることができました。今後も地元の方言に関するイベントを開催し、地域の絆を高める取組を継続することで、さらに活性化を図っていきたいです。

また、方言はさまざまな人の出入りや交流によって変化するため、今後も方言研究者の視点から、方言教育のアドバイスなどをいただき、地域の伝統とともに次世代に継承していきたいです。

参加者の声

「忘れていた方言を昔の思い出とともにじわじわと思い出し、懐かしい雰囲気を体験できました」「地域のおじいちゃん、おばあちゃんと触れ合うことができました。かるた大会で分からない方言も耳にしておもしろかったです」「孫と同じ場所で方言について学べる機会は滅多にないのでいい機会でした」



取組
団体

ふたば未来学園高等学校を支援する会

代表者 鈴木 正範さん

取組
名称

地域へつながれ！笑顔と元気プロジェクト

取組の概要

福島県立ふたば未来学園高等学校の生徒の約半数は被災経験があり、ふるさとを離れて暮らしている者も多くなります。しかし、ふるさとへの想いは失われておらず復興を願っています。そのため、取組の「広野町バナナプロジェクト」「大熊町いちごプロジェクト」「サツマイモプロジェクト」では、地元農産物に対する風評被害を払拭し、安心安全を訴求することで復興を後押しすることを目的としました。

取組の様子

当初計画していたイベントは、新型コロナウイルスの影響で中止となりましたが、気持ちを入れ替え、農産物に関わる役場の方や町民の方に対して自分たちで開発した商品のPRを行いました。広野町産のバナナを使った商品発表会は広野町振興公社で実施。大熊町産のいちごを使った商品発表会はネクサスファームおおくまで実施しました。発表会では、地域の方々に対して試食とアンケート調査を行い、その結果に喜んだり更なる改良を検討したりしました。また、こども園ではサツマイモの苗の植え付け、収穫を実施しました。収穫後に、生徒と園児たちは、サツマイモのつるを使ったクリスマスリース作りを一緒に行いました。取組を通して500名程の方に農産物をPRすることができました。

生徒たちと話し合い、今後は震災から10年の節目を迎えたこともあり、バナナを使った防災食の開発に挑戦する予定です。商品の開発を通して震災を風化させることなく防災意識を高めていきます。そして、ふるさとの産業復興のため、農産物の風評被害の払拭に貢献していきます。

実施者の声

新型コロナウイルスの影響によって、当初計画していた大きなイベントがすべて中止となり、できる範囲でのイベント開催となりましたが、事後アンケートの結果を見ると今回の取組の意義や復興への思いは地域の方々にしっかりと伝わったと思います。生徒たちは自分たちのふるさとのためにと、商品開発では活発に意見を出し、何度も試作を行いました。こうした課題解決への姿勢を育み、地域へ還元すべく、今後も取組を行ってまいります。

参加者の声

「広野町や大熊町を元気に笑顔にする取組であったと思います」「若い世代の高校生が取り組むことで、さらなる地域の活性化にもつながるものになりました。一つ一つを積み重ねることによって、双葉郡の復興につながっていく取組になったと思います」



取組
団体

NPO 法人富岡町 3・11 を語る会

代表者 青木 淑子さん

取組
名称

町のにぎわいづくり支援事業～日曜カフェ企画運営～

取組の概要

富岡町内の日曜日は、複合商業施設以外ほとんど開店していません。そこで、毎週日曜日にカフェを開き、子供から高齢者まで幅広い年代が集いやすく、町民に限らず富岡町を訪れた方々が気軽に立ち寄れるカフェを作りました。また、町民が主体的にカフェ運営に関わることによる新たな生きがいつくりと、この取組に参加することが町のにぎわいを生み出し、活性化につながっていくという意識が高まることを目的として実施しました。

■取組の様子

町内の復興住宅が立ち並ぶ中にあるカフェの運営を、帰還した町民や新たに町民になった方々とふたば未来学園高等学校の生徒10名が中心となって行いました。訪れた方は、近隣の富岡町民だけでなく仕事のために町に居住している方や、富岡町に立ち寄った方など幅広い層となりました。カフェの内装やBGM、震災後にドローンで撮影された町の様子を映像として流すなどの工夫をし、コーヒーと共に、日曜日のひと時をゆっくりと過ごす空間を提供することができました。また、クリスマスイベントとして、クリスマスリース作りを開催しました。お互いに完成した作品を眺めながら感想を語り合うことで、新たなつながりを創ることができました。カフェを通じて、初めて出会う方々がさまざまな交流を図ることができました。

来年以降もカフェを継続し、「楽しみながら」富岡町民が運営することで、新たな町のにぎわいを創出していきます。

■実施者の声

毎回20名前後が参加し、町内で日曜日の交流が生まれたという実感があります。参加者は帰還した町民・新たに町民になった方、仕事の為に来ている方と多様であり、意義のある交流の時間が作られました。また、地元の高校生とコラボしたことで世代を越えた交流ができました。今後は、主体的に取り組んでいく町民の参加をさらに促進します。カフェを継続し、富岡町の日曜日の憩いの場、被災者にとどまらない交流のキーステーションを目指します。

■参加者の声

「富岡に来る目的のひとつに日曜カフェがあります」「人も少しずつ増えてきて、カフェもできて活気が出てきたと感じました」「人口はまだまだですが、復興は進んでいます。ふるさとに戻る気持ちのやすらぎはなんともいえません。日曜カフェができて人々の交流も生まれました」



取組
団体

川内盛り上げっ課

代表者 秋元 活廣さん

取組
名称

かわうちお楽しみプロジェクト

取組の概要

震災による全村避難後の、川内村内の地域コミュニティ再生のために、4年間継続してさまざまなテーマによる講座を開催しています。講座を通して、新旧の住民同士の交流機会が創出されるとともに、村外からの参加者に対しては川内村の魅力を発信する機会にもなっています。村内外からさまざまな分野の講師を招き、年齢を問わずに楽しめる講座を開催しました。

取組の様子

村民有志の任意団体である「川内村盛り上げっ課」では、芸術、文化、社会問題などのさまざまなテーマで講座を開催しました。講師は村民や、村民とつながりのある人物・団体から選出しました。各講座は川内村の文化に触れ親しむ機会の創出や、村での暮らしを豊かにする知識の獲得を目的に開催しています。また、村内の新旧住民、村内外の方々に対する交流の場を定期的に設けることで、新たなつながりが生まれています。活発な交流によって村の更なる発展を図ることも目的の一つです。

4年目を迎えた今年度は、野外での音楽イベント、藍染講座、ヨガ講座、坐禅講座、ラテンダンス講座、ミツロウクリーム講座、歌声喫茶、正月飾り講座の全9回を開催しました。特に、藍染講座、正月飾り講座、歌声喫茶は村民の方々にとっても毎年恒例となっており、口コミで参加者も増え、技術も向上しています。音楽イベントや、ヨガ、ラテンダンス講座には、村外の参加者も多く、川内村の自然を感じながら音楽を聴き、身体を動かすなど交流を楽しみました。

実施者の声

新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、当初は開催に不安もありましたが、たくさんの方々に参加して頂くことができました。参加者からは、「楽しかったです」という声を多く聞くことができ安堵しています。今年は特に、口コミで参加された方が多く、村民の方に取組が広く浸透している実感を得ることができました。これからも参加者の方々の声を励みに、皆さんが「楽しい!」「また川内村に来てみたい!」と思える活動を続けていきます。

参加者の声

「ぜひまた参加したいので次年度以降も継続してください」「初めて川内村に来ましたがとても良いところですよ。イベントが無くてはまた観光で来たいです」「素晴らしい参加者のみなさんとともに、楽しい講座を受けることができ本当に来て良かったです」



取組
団体

一般社団法人ふたばプロジェクト

代表者 高野 泉さん

取組
名称

ふたば、ふたたび。まちなかガーデンプロジェクト

取組の概要

常磐線の全線開通や双葉駅のリニューアルオープンなど復興に向けた動きが活発化し、令和4年春予定の住民帰還開始に向けた環境整備が進められています。しかし、建物の解体が進み、更地化し昔の面影がなくなっています。そこで、町民の帰還促進、交流人口の拡大、コミュニティの再形成を目的に市街地に花を植える取組を実施しました。

取組の様子

JR双葉駅周辺の花植えには双葉町の町長や、町民、ふたばファンクラブ会員、復興作業関係者など約80名の方々が参加しました。この日、植えたのは町の木でもあるセンダンの他、バラ、クリスマスローズ、チューリップ、ビオラなど500苗以上です。あいにくの雨模様ではありましたが、参加者同士で植え方を教え合い、協力し合って作業を進める姿が見られました。また駅前以外の、いわき市双葉町立幼稚園やいわき市内の小中学校にも花を植えました。児童や教員も合わせると、取組全体への参加者は150名を越えました。震災前の双葉町には双葉バラ園があり、カーネーションやガーベラなどの花卉栽培も盛んで、町民の身近にはいつも花がありました。そのため、花を植え、町を彩ることで、避難している町民同士が再びつながりを感じることができました。花を生かしたまちづくりを行うことで、町民同士のコミュニティが再形成されるとともに、町外の方々が双葉町を訪れるきっかけを作り、復興の進展を感じるものとなることを目指しています。

実施者の声

双葉町でたくさんの方が笑っている姿、花を植えている姿、お茶を飲みながらおしゃべりする姿は、どれも“当たり前の様で当たり前ではない”本当に尊い光景でした。今後は、双葉町の空気を肌を感じながらこの庭や花の手入れを継続し、より多くの方々と共に双葉町への愛着や新たな想いを深めていきたいです。そのために、今後も花植えを通じた活動を町内に少しずつ広げていくために取組を継続していきます。

参加者の声

「帰りたくてもなかなか帰れないふるさとだけど、春に花が咲くのを楽しみに定期的に訪れたいです」「花植えに声をかけてもらったことが、避難先から双葉町を訪ねる良いきっかけになりました」「自分が植えた花が咲いたかを確認しに定期的に訪れる楽しみができました」「双葉町に来る楽しみが増えました」



取組
団体

NPO法人福島県スポーツマネジメント協会

代表者 山田 司さん

取組
名称

「震災10年。子供達とともに浪江町の将来を描く」

取組の概要

町の復興は進んでいますが、住民には浪江出身者ではない方も多くおります。そこで、子供たちが模型を使いながら、浪江町の未来を描く取組を実施しました。また、オリジナルソングを通じて、浪江町を知り愛着を持ってもらうきっかけ作りも行いました。どちらも、町の新たな魅力の発見と、地域のつながりの創出を目的としました。

取組の様子

震災後の浪江町をイメージしてあらかじめ作成した模型を見ながら、子供たちが未来の浪江町を思い描いて、絵を描きました。次に、この絵を元に「10年後の浪江町に欲しい施設」を制作して、その模型に加えていきます。一番多かった意見は「町にプールを作りたい」というものでした。この子供たちの声を今後のまちづくりに生かしてもらえるよう、地元自治体へ伝えていきます。

また、地元自治体や行政区の区長、まちづくり団体などの関係者、そして町民の方々が集まって、浪江町オリジナルソング「いくどはあ★なみい」（「浪江に行こう」の意味）の作詞・作曲を行いました。浪江町の地名や方言を取り入れた、テンポの良い明るい曲を作ることができました。歌い手も町民の中から2名をオーディションで選出し、誰でも踊れる振り付けました。子供たちはこの歌と踊りを発表するため、毎週一回、なみえ創成小中学校で放課後に練習を重ねました。発表会は、浪江町地域スポーツセンターで実施しました。同時に、新型コロナウイルス感染の影響で来場できない方々や、避難者の方々のために、オンラインでライブ配信を行いました。動画は、引き続きWEBに掲載されており、視聴者は順調に増加しています。

実施者の声

取組を通じて、子供たちや町民の方々と浪江町の未来を考えるきっかけ作りができました。模型作りでは未来を担う子供たちの意見を聞くことができました。「老若男女の誰もが口ずさむことができ、力が出る前向きな歌を浪江町でも作りたい」という思いを込めたオリジナルソングの発表会では、子供たちの力を借りて浪江町の魅力を多くの方に発信することができました。今後も、生まれ育った浪江町の復興に貢献していきます。

参加者の声

「これからもみんなで浪江町の未来を考えていきたいです」「子供たちが描いた将来の町づくりを町民皆の力で実現して欲しいです」「楽しい曲とダンスを通して、地域外の方にも浪江町を知っていただきたいです」



取組 団体

いわき浪江押し花会

代表者 志賀 智恵子さん

取組 名称

押し花教室

取組の概要

東日本大震災によって、浪江町からいわき市に避難してきた方々が少しでも楽しみ、生きがいを作るために押し花教室を開催しました。この取組を通して、浪江町民が少しでも元気を取り戻し、明るく生活できることを目的としています。押し花教室を月に1回開催し、さまざまな種類の花や葉の押し方や、押し花絵を組み立てて行く手順などをみんなで学びました。

取組の様子

いわき市に避難してきた浪江町民が集り、「なみえ絆いわき会」を作り、「なみえ交流館」で月に1回、押し花教室を実施して来ました。参加者は、浪江町民で、押し花絵に興味がある方々です。押し花インストラクターの先生にご指導いただき、花の押し方から、押し花絵の作り方、並べた押し花とガラスの間を真空にして、額に入れる方法などを学び、いろいろな押し花絵を作りました。制作時は和気あいあいとした雰囲気、完成した作品をお互いに見せ合い、批評したり、励まし合ったりするのも楽しいひと時でした。できあがった作品の写真を浪江町のホームページに投稿し、広く町民の皆さんに見て頂いています。作品の制作だけでなく、オンライン上で発表していくことで、参加者以外の浪江町民にも働きかけることができています。参加者にとっても押し花絵づくりが生きがいとなり、皆さんは生き生きとやりがいを持って活動することができました。

実施者の声

新型コロナウイルスの影響もあり、予定通り教室を開くことができませんでした。しかし、再開後は皆さんが押し花絵の制作に意欲的に参加しています。制作は楽しく生きがいとなっているようです。押し花絵は花を育てることから始まります。今まで作ったことがない草花の押し方や花びらの組み立て方などをさらに深く学び、皆さんと素敵な作品作りに取り組んでいます。この教室を通してさらに交流の輪を広げ町民コミュニティの再構築ができるようにしていきます。

参加者の声

「作品の完成は大きな喜びとなっています。教室で浪江の方々とも再会することができ、励まされ、元氣になりました」「月1回の教室を楽しみに待っています。新型コロナウイルスの終息を願うばかりです。でき上がった作品を眺めて家族にも喜んでもらっています」



取組
団体

いいたて未来創造の会

代表者 森岡 賢治さん

取組
名称

「世界で一つのオリジナル器をつくろう Part2」

取組の概要

飯館村は全村避難を経験し、帰村宣言後の帰還率も未だ2割程度です。本取組では、飯館村に帰還している村民、避難している村民、村外へと拠点を移した村民を対象に、エールを送ることで元気を出してもらい、村民同士のつながりを再び取り戻すことを目的としました。村民同士のコミュニケーションを再構築し、地域内の絆の強化を図りました。

■取組の様子

飯館村の村内にある「飯館村交流センターふれ愛館」で、ハンドメイドのオリジナル器の制作を行いました。参加希望者が大変多かったため調整を行い、毎月の開催では15～16名程が計5回、お祭りでは100名を超える方々が参加されました。年齢層も小学校中学年から70歳代までと幅広いものでした。

制作を行ったのは、ポーセラーツという白磁のマグカップ、コーヒーカップ、お皿に、模様の付いた転写紙を自由に切り取って貼り付け、電気炉で焼成するオリジナルの器です。毎回異なる作品制作を行いました。参加者にとってはポーセラーツという名称自体があまり聞き慣れないものであったため、最初は戸惑いもありました。しかし、制作が進むうちに独自の作品を創る楽しさと喜びがあふれてきたようでした。参加者同士がお互いの作品を見ながら、和気あいあいと意見交換をするようになりました。「ものづくり」を通して円滑なコミュニケーションを図ることができ、村内外の参加者同士の触れ合いの場を生み出すことができました。

■実施者の声

飯館村内外に暮らす村民同士の、触れ合いの場づくりが実現できたと思います。村民同士のコミュニケーションを図ることで、村内の活性化につなげることができました。今後も、ポーセラーツという“ものつくるたのしさ”を一緒に体験することで、参加者の豊かな心と笑顔を育んでいきます。村民同士の触れ合いや、コミュニケーションの強化を図り、避難されている村民の方々にとって飯館村とのつながりがさらに深まる活動にしていきたいです。

■参加者の声

「まだ避難されている方も含め、村民同士で気さくに話ができるようになり、楽しいひと時を過ごすことができました」「村内外の飯館村住民同士が交流する機会をもつことができました」「自分だけのオリジナルの器作りに面白さと楽しさを感じました。大切に使いしていきたいです」「いろいろな器作りをもっと体験したいです」



**取組
団体**

いいのどんぐりの会

代表者 山田 恵さん

**取組
名称**

**子どもと母親、高齢者へのアロマセラピーワーク
ショップ開催事業**

取組の概要

アロマセラピーとは、心と身体の健康に役立つ芳香療法です。植物の香りのエッセンス（エッセンシャルオイル=精油）を、心身の健康維持に役立てます。香りをかいだり、希釈したエッセンシャルオイルでトリートメントし皮膚から取り入れ、健康に役立てることができます。震災や新型コロナウイルスによるストレスを緩和することを目的にワークショップを開催しました。

取組の様子

いいのどんぐりの会は、震災後に飯舘村から福島市の飯野復興住宅に避難していた、“子供のいるお母さん世代”が中心となって始まりました。2020年6月には、子供たちの孤立を予防し、安心して過ごせる居場所として、飯舘村内に「どんぐりハウス」という交流スペースを設けました。

取組では、子供たちの親御さんに向けたアロマセラピーのワークショップを開催しました。香りは直接的に感じるものです。「好きな香り」や「リラックスする香り」など、人それぞれの好みに合わせた「香り」の使い方をすることで、心身の健康にさまざまな効果を得ることができます。今回は、アロマセラピーの勉強をしながら、自分の好きな香りを作る目的でワークショップを開催しました。香りを体験することで、東日本大震災や新型コロナウイルスの影響による疲れや不安を解消するなど、ストレス社会が人体へ与える影響を癒すことを目的としました。参加者同士の交流も盛んに行われ、新たなやりがいやつながりが生まれたことで、目的を達成することができました。

実施者の声

参加者の皆さんの笑顔が多くあふれるワークショップを開催することができました。皆さんが、真剣にアロマセラピーを学ぶ姿を見ることができました。実施する側も初めての取組でしたが、綿密にスケジュールを立て、打ち合わせを重ねてきたので大きな問題もなく開催することができました。今後もこうした取組を積極的に行っていくことで、参加者の方の心や身体の癒しの機会を創出し、地域の活性化に貢献していきます。

参加者の声

「はじめてのアロマセラピーでしたが、講師の先生に丁寧に教えていただき、とても楽しかったです」「普段はあまり外に出る機会がなかったので、こういった教室があると他の方とお話することもできずし、交流できるのでとても良かったです」



取組 団体

県営住宅南町団地入居者会

代表者 本田 正義さん

取組 名称

ふるさとを思いみんなで地域伝統工芸を学ぶ「大堀相馬焼陶芸教室」

取組の概要

南相馬市の南町団地には230世帯(約400人)が入居しています。そのうちの、6割が浪江町出身者であり、残りが他の相双地区からの避難者です。さまざまな避難元が混在する復興公営住宅では、異なる避難元の入居者同士の交流が進んでいません。そこで、相双地域の伝統工芸である「大堀相馬焼」による陶芸教室を開催し、団地内での新たな交流を促進しました。

取組の様子

団地の敷地内にある集会所で陶芸教室を2回開催しました。未就学児から高齢者まで合計49名の老若男女が参加しました。それぞれの回で制作したものは異なり、1回目は粘土成形による皿づくり、2回目は素焼きマグカップの絵付を行ないました。2回目の開催時には、1回目の作品展示を行い、参加者の皆さんからは大変好評をいただきました。教室には男女ともに初めて交流会に参加するという方も見られ、この取組における成果となりました。また、団地の代表管理人が教室開始前に挨拶も行き、入居者と役員との顔つなぎの場ともなりました。相双地域の伝統工芸「大堀相馬焼」は、入居者の多くがふるさとを思い浮かべることができる地域産業です。ふるさとを忘れたくないという思いに寄り添いながら、避難元が異なる入居者が共に参加する交流会を開催したことで、コミュニティ形成や孤独死予防などの課題に対するアプローチができました。今後も、入居者同士のつながりを育む機会を作り団地内の課題に向き合っていきます。

実施者の声

感染予防としてパーティションを配置していましたが、粘土をこねながら作業をすることで会話もはずみ、思い思いに作品を作りながら、交流会を楽しみました。そして、この交流会を開催したことで、異なる避難元の入居者の方々の新たなつながりを創ることができました。今後はこの交流をさらに深めるために、陶芸教室に限らず、今回作った皿を使った料理教室なども考えていきたいです。

参加者の声

「避難元の顔馴染みの方が講師だったので、先生の顔が見たくて参加しました」「教室で『えっ、近くの家だった〇〇さんだね?』という方に会い、団地に住んで約3年になりますが、未だに顔を知らない方が多いことに気が付きました。教室を通して新たな親睦を深めることができました」



取組
団体

めん羊クラフトの会

代表者 田井中 裕子さん

取組
名称

羊毛でつながるコミュニティの輪

取組の概要

東日本大震災の時に家畜をすべて失った南相馬市小高区にある牧場が、めん羊の飼養を再開し、毎年春に刈り取った羊毛をいただけるようになりました。そこで、地元産の羊毛を利用するクラフトなどの加工体験会を開催し、地元の人々や都会の人々に、羊毛を使った手仕事の素晴らしさを伝えながら、コミュニティの活性化を目指した取組を行いました。

取組の様子

新型コロナウイルスの影響もある中、安心して参加していただけるように、公共施設での感染拡大予防ガイドラインを遵守し実施しました。地元の方々を中心に口コミで参加者を募り、延べ56名の方々が参加しました。今回は4～10名以下のグループに分かれて、羊毛を使ったクラフト制作や糸紡ぎを行いました。「楽しく簡単に」をコンセプトに羊毛とプリザーブドフラワーやアートフラワーを組み合わせたボックスやディフューザーなど制作しました。作業を楽しみながら、次に作りたいものことや昔羊を飼っていたことなど、ちょっとしたおしゃべりしながらの和やかな取組となりました。

また、保育園での食育サポーター活動と連携した取組として、園でのクラフト体験も実施しました。どの子供たちも真剣に作業に取り組んでいました。作品の完成後には羊の鳴きまねをしながら楽しむ姿などたくさんの笑顔を見ることができました。体験を通して、地域で伝統的に飼養していた羊について知り、その恵みを実感してもらうことができました。

実施者の声

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、体験会を開催することに不安なこともありましたが、参加者それぞれが緊張感を持って共に時間を過ごし、小さな輪であっても人とのつながりを実感していただけたことは成果の一つだと考えます。今後も、羊毛を使った小さな取組を継続し、大きな取組が可能になった時には、それを通してさらにコミュニティが活性化するようにしていきたいと考えています。今後も、参加者に寄り添い、楽しみや生きがいにつながる取組を目指していきます。

参加者の声

「新型コロナウイルスの影響で外出や集まりを自粛していたため、買い物や病院に出かける、または家族とだけ過ごして来たので、久しぶりにいろいろな方々と交流できてうれしかったです」「みんなが元気にことに安心しました」「羊毛でこんなこともできるのかと、びっくりしました」



取組
団体

パッチワーク・コスモス

代表者 伊藤 ハル子さん

取組
名称

手芸やガーデニングを通して生きがいを見出す教室

取組の概要

パッチワーク教室やガーデニング教室を通して、12市町村の避難者と地域住民との交流を深め、孤独であった避難者と地域住民に生きがいを見出す取組です。地域共同作業展などに積極的に参加することで、技能を向上させ作品制作に対する喜びや楽しさを感じるによって、それぞれが生きがいを見出すことを目標としました。

■取組の様子

この教室の会員といわき市中央台公民館で活動している教室が交流を図りながら共同で作品展を開催することを目標に作品の制作を行いました。会員の中には、浪江町、大熊町、富岡町、檜葉町から津波の被害によって避難してきた方もいます。また、地域住民にも海岸沿に住んでいた方で津波の被害にあわれた方もいます。こうした背景から今年度の作品展は「絆」をテーマに東日本大震災の復興と被害に会った多くの方々が希望、勇気と生きがいを持つことを願うものとししました。新型コロナウイルスの影響で作品展は延期となりましたが、浪江交流館において、パッチワーク教室とガーデニング教室を開催することができました。取組を通して、これまで面識のなかった会員と地域住民に新たな交流も生まれています。また、作品制作のみならず、作品展の企画を共に行うことで、趣味を通じた交流も広がっています。多くの参加者が教室の開催を楽しみにしている姿を見ることができました。今後は延期となっている作品展の開催に向けさらなる準備を進めていきます。

■実施者の声

新型コロナウイルスの影響でさまざまなイベントが中止や延期となりましたが、本取組を行うことで、今まで知らなかった地域の人との交流が生まれコミュニケーションの輪を広げることができました。今後は、パッチワーク教室やガーデニング教室だけでなく、地域の人が取り組んでいる草木染や遠野紙漉きなどにも挑戦していきます。そして、今後も参加者の生きがいづくりに積極的に取り組んでいきたいです。

■参加者の声

「避難をして孤独になっていた会員や地域住民とのコミュニケーションを広げることができました」「趣味の手芸やガーデニングを通して生きがいを見出すことができました」「教室を継続にすることに多くの困難がありましたが、この支援事業によって新たな交流の場を作ることができました」



取組
団体

県北方部復興公営住宅親睦会

代表者 熊田 伸一さん

取組
名称

第2回県北方部復興公営住宅合同グラウンド・ゴルフ交流会

取組の概要

震災から約10年が経過し、県北方部の復興公営住宅(団地)では集会所などを利用し、団地ごとに住民の交流は深まりつつあります。しかし、他団地との関係性は希薄です。そこで住民同士のつながりを創出すべく、地域住民が一堂に会すグラウンド・ゴルフ交流会を開催しました。今回は新型コロナウイルスに配慮し、福島地区と二本松地区の2カ所に分けて行いました。

取組の様子

交流会は屋外運動場及び屋内運動場の2カ所に、県北方部の団地の入居者、地元グラウンド・ゴルフ協会、福島大学災害ボランティア・センターの学生、避難元社会福祉協議会、生活支援員が参加して実施しました。福島地区は雨天であったため、屋内施設でクラブやボールを利用し、ホールインワンゲームを行いました。二本松地区では4~5名の班を編成し、屋外グラウンドでグラウンド・ゴルフを行いました。どちらの会でも、他団地の住民同士と一緒にプレーすることで、新たな交流が生まれ、笑いの絶えないひと時となりました。開催にあたっては、看護師が救護班として待機し、体調不良や怪我に備えたことで、高齢者も安心して参加することができました。これまで、団地ごとの行事はありましたが、団地を横断し広い会場での行事は久しぶりであり、普段味わうことのできない開放感を味わうことができました。

また、各団地から選出された役員が運営にあたったことで、役員同士の横のつながりも強固なものとなり、自治会運営の悩みなども相談ができる関係性が構築されました。

実施者の声

団地住民が高齢化する中、他団地の住民同士が横のつながりを求めて交流会に参加していただきました。高齢者が多いため次年度以降の開催については、会場までの交通手段を確保するのを感じています。また、今回は社会福祉協議会生活支援員の方の協力を得て交流会の周知や当日の運営をすることができました。道具の借用についても、近隣の社会福祉協議会や老人クラブと連携ができ、近隣地区とのつながりを創出することができました。

参加者の声

「避難後どこの団地に入居したか分からずにした知人と再会できました。連絡先を交換したので、昔通りお互いを行き来できる関係に戻れました」「今回は、各団地をバスが巡回しており、会場まで心配せずに行くことができました。来年もさらに交流の輪を広げられるような交流会を開催して欲しいです」

